



Title	「たくさんの授業をありがとうございました」
Author(s)	山口, 清美
Citation	大阪大学英米研究. 2014, 38, p. 18-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99378">https://hdl.handle.net/11094/99378</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「たくさんのお話ありがとうございました」

山口 清美

(2006年大阪外国語大学言語社会研究科言語社会専攻修了)

杉本先生、ご定年退職おめでとうございます。大阪外国語大学、大阪大学で長きにわたり、私たち多くの学生をご指導いただき、ありがとうございました。

私は社会人として1997～2006年まで大阪外国語大学に在学していました。先生に初めてお目にかかったのは、学部2年、98年の英語学概論の授業（『日英語対照による英語学概論』）でした。先生に関する予備知識が全くなかつた私が、最初に衝撃を受けたのは先生の若々しいお姿でした。サラサラの黒髪（杉本先生曰く、ビートルズのマッシュルームカットだそうです）に、Gパン、白シャツ姿だったと記憶しています。当時の先生はスリムでGパンが似合つていて、「若い先生やなあ、何歳ぐらいかな。昔の青春ドラマの先生みたい…」とか、「どこから見ても30代にしか見えない。」など勝手な想像をめぐらしていました。ところが、授業では滔滔と濶みのない説明が展開され、必死で付いていくうちに、先生への羨望と言語学への興味や期待が大きくなっていました。

その後、私は追っかけのように、先生の担当される授業を受講していました。知らないことを知る喜びと同時に、授業は楽しくて刺激的でした。先生の授業でスゴイと思ったのは、その引き出しの多さに加え、年度内でテキストを終わらせるという誠実さでした。そのために補講が実施されたこともしばしばありましたが、先生の授業に対する責任感のようなものを感じ、社会人として共感したことを覚えています。授業から研究のヒントを頂いたこともしばしばありました。最大のひらめきが得られたのは、前期課程2年の授業で取り上げられた *Philosophy In The Flesh* でした。当時の私は英語類別詞の研究に、どのようにして認知的視点を導入するかということで行き詰つ

ていました。あの授業が突破口となり、認知的発想が広がり、修士論文・博士論文へと繋がっていきました。

先生と私たち学生との関係は、極めてリベラルでフランクなものでした。私たちとの授業外の集まりを楽しみにされ、いつもウーロン茶でアルコールは一滴も飲まれないのでご参加いただきました。自ら幹事を指名されて宴会を企画するように依頼されることもしばしばありました。宴席で学生と談笑される様子は、その若々しさから違和感なくグループに溶け込んでおられ、不思議な感覚を覚えたこともあります。

その一方、研究については院生個人の意志に任せているように思いました。強くプッシュされることはほとんどありませんでしたが、私たちの学会発表、特に初めての発表には足を運んでくださいました。私の日本英語学会での初発表も「行けない。」と言われていた先生が、突然、静岡県立大学に来られてびっくりしました。あの日、マイクを持つ手がガタガタと震え、後にも先にもあんなに緊張したことはありませんでした。発表後、先生は「すごく緊張していたなあ。大阪外大なのに、大阪弁の英語が恥ずかしかったよ。」と言われながらも「とりあえず、良かった、良かった。」と喜んでくださいました。

後期課程への進学をご相談した時には「博士論文を書くだけなら論文ドクターという方法があるよ。時間とお金を使って大学に来なくても良いよ。」と言われました。その時は私の覚悟を尋ねておられるのだと思いましたが、その真意と重要性に気づかされたのは大阪外大を修了してからでした。後期課程では論文指導ではなく、きっちりとテキストや文献を使って授業をして頂きました。限られた時間で研究を進めていた私にとって、新しい論文や知らないジャンルの研究に触れるができる貴重な機会でした。授業のご準備などが大変だったにもかかわらず、積極的に授業をしてくださったことにとても感謝しています。

私の在学中は大阪外国語大学の副学長、大阪大学との統合など、ご多忙を極められておられましたが、いつも授業を大切に思い、学生に寄り添ってお

られたことが今も心に残っています。私の人生で最も幸せで充実した時期を支えてくださったことを感謝しております。

これからもいつまでも若々しく、「先生らしさ、杉本イズム」を貫かれることを期待しております。本当に、長い間、ありがとうございました。